

## メモリアルスローンケタリング癌センターでの 海外研修を終えて

(独)国立がん研究センター  
東病院病棟部7A病棟(肝胆膵内科) 医長  
池田 公史



写真1 :MSKCCのメインキャンパス(左)と研究棟(右)

このたび国立がん研究センター東病院の江角浩安院長のご尽力により、第3次対がん10か年総合戦略(研究課題:QOLの向上をめざしたがん治療の開発研究)の平成21年度の外国への日本人研究者派遣事業の一環として、2009年11月5日から2010年1月15日までの2.5ヵ月間、メモリアルスローンケタリング癌センター(Memorial Sloan Kettering Cancer Center: MSKCC)にて海外研修の機会を得て渡航してきました。MSKCCは、米国でも1, 2を争う高名な癌専門病院で、癌の発生のメカニズムから、予防、早期発見、治療まで、最新の方法を取り入れながら、癌診療に取り組ん

でいる病院であります。そのMSKCCにおける診療の実際、消化器癌、中でも私の専門領域である肝胆膵癌の非手術療法の現状を視察し、本邦の診療との相違点、問題点を明らかにし、米国のチーム医療体制、接遇、実際の診療の流れなど参考にすべきこと、今後どのように取り組むべきかを研修することを目的として研修してきました。また、MSKCCでの最新の肝胆膵癌の治験や臨床研究の情報を収集して、今後、本邦での臨床研究にも生かせるような知識を得ること、そして米国の臨床腫瘍医と親密な交流を図り、帰国後も情報交換をできるような交流関係を作ることも目的として



写真2：外来の待合室

MSKCCでの研修に取り組んできました。

MSKCCは米国のニューヨークのマンハッタン島を中心に10数ヵ所に分かれて病院が存在しています(写真1)。私がよく通った外来棟は、新年のカウントダウンで有名なタイムズスクエアやクリスマスツリーで有名なロックフェラーセンターまで歩いて10分程度の距離にあり、まさに国立がん研究センター中央病院が銀座まで歩いてすぐの距離にあるのと同じぐらいニューヨークの中心に位置しています。それほど中心にあるにも関わらず、外来診療棟だけで11階もありほど、スペースを広くゆったりと使っており、息苦しさ感が全くなく、患者さんやご家族も一緒にゆっくりと診察を待っています(写真2)。その外来棟で、消化器科はその1階分を占拠しているのですが、診察している先生は7-8人で、診察室を3部屋、多い先生では7部屋使用して、各部屋を訪問しながら診察しているのにまず驚かされました。そして、その一人の先生をサポートするコメディカル方も多く、初診患者の問診をとったり、再診患者の状態を確認したりするフェローの先生が1-2人、治療法の補足説明をしたり、服薬指導したりするリサーチナースが1-3人、治験の患者のマネージメントをする治験コーディネーターが1人、次回外来予約や検査の説明などを行う秘書が1-2人と、外来を5-8人のチームで診療していました。したがって、医師が

関わるのは、治療方針の決定など、医師としての判断が必要な部分のみであり、医師が診療に専念できる環境であり、その分、患者に丁寧に説明する時間が取れ、必要があれば1時間でも時間かけて説明している光景が各先生でしばしば見られ、しっかり診療をしているのを感じました。また、高名な先生だからと言って奢ることなかれ、一人一人の患者さんにしっかり向き合って熱心に説明しており、これは我々も忘れてはならない姿勢であることを痛感しました。1人の医師に4-5畳しかない外来診療スペースで、外来担当医師10人前後に対して2-3人の看護師と2人ぐらいの事務の方で時間に追われながら運営している我々の外来とは全く異なり、MSKCCは診療レベルの高さのみならず患者満足度も高い病院である所以が十分理解できました。

入院棟は、外来棟とは別の場所でいわゆる高級住宅街のような場所にあります。ただし、化学療法は基本的に外来通院治療であるので、入院してくる患者さんは状態の悪い患者さんか副作用で点滴や抗生剤管理が必要な患者さんであります。入院は外来担当医が持ち回りの当番制で診ているようで、通常、その当番の先生とレジデントの先生だけで病状の説明から治療方針決定まで行われており、他の先生は当番でなければあまり診ることはないようで、外来から入院まで同じ医師で診る

ことが多く、入院治療が重視される日本とは異なる現状で、合理的な米国らしいシステムだなと感じました。

また、肝がんの局所治療にも興味があったため、放射線科も見学させていただきました。放射線科でもチーム医療が行われており、放射線科医1人に対して、技師さん3-4人、看護師さん1-2人と手厚い看護下で検査・処置が行われており、やはり医師は本当に必要な手技だけを行っていました。また、経皮的胆道ドレナージやラジオ波焼灼術は、日本では局所麻酔下に超音波ガイド下で行う手技ですが、MSKCCでは全身麻酔下にCTガイド下で行われていました。比較的痛みを伴いやすい手技には積極的に全身麻酔が行われており、また米国人は体格がよい方が多く、超音波では皮下や内臓の脂肪のためよく観察できず、CTを用いた手技が多いこともお国柄の違いを感じました。処置中、医師の好みの音楽が掛けられており、ハードな曲が好きな医師の場合には、鎮静剤が使われているとは言え患者さんも結構つらいのではと感じずにはいられませんでした。また、ちょうど研修させていただいた時に、放射線科のクリスマスパーティー(写真3)が行われたのですが、それがなんと朝8時から午前中の検査を止めて行われていたのが非常に驚きでした。さすがにアルコールは飲んでいませんでしたが、朝からテンション高く、みんなでクッキーやドーナツ、フルーツなどをほ

お張り、楽しくプレゼント交換などを行って和気藹藹と楽しみ、そして午後からは真剣に処置に取り組んでおり、メリハリを保ちつつ仕事に勤しんでいるところは日本では見かけない光景でありました。

さて、肝胆膵内科の診療の方に話を移したいと思います。私がお世話になったのは、膵癌、胆道癌の領域ではDr O'Reilly、肝癌の領域ではDr Abou-Alfaで(写真4)、彼らの外来には毎回同席させていただき、忙しい外来のさなか、いろいろ質問させていただき、米国での化学療法の考え方を学ばせていただきました。また、私からも様々な臨床試験の結果や我々の新たな取り組みについても提示させていただき、どのように展開すべきかなどをご教授いただきました。通常、主要な学会などで壇上で意見を述べられているような先生方の診療に同席させていただき、私の簡単な質問から難解な変な質問まで熱心に答えていただきました。皆、非常に気さくな方々で、あれほどの高名な先生方ですが、ユーモア交えて説明してくれて非常に身近に感じられました。MSKCCでの診療は、基本的に日本の保険診療のように縛りが多いわけではなく、患者の治療に必要なだと判断する抗癌剤は保険会社と話合っ使用することもできるので、多種多様な抗癌剤を使用して患者の治療を施しています。特に著名な雑誌に掲載された治療はだいたい使用することができるようで、第III相試



写真3：朝8時から行われたクリスマスパーティー

験で有用性が示されないと行われたいわけではなく、日本ではまだ行っていない新たな抗がん剤や併用療法なども多数行われていました。我々は、これまで臨床試験のエビデンスを重要視してエビデンスの確立していない治療は行わないという方針を貫いてきました。それは臨床腫瘍医とはエビデンスに固執するのだと、欧米を見習ってそういう姿勢を貫いてきたのだと思っていたのですが、実際にMSKCCの先生方の診療を拝見すると、我々の方が頑なにエビデンスに固執しすぎているのかなと、もっと臨床に即した対応をすべきなのではと、多少、考えさせられました。また、行われていた治験/臨床試験に関しても、特別目新しいものや多岐にわたる様々な研究が行われているわけではなく、原則、一つの病態に一つの新規治療レジメンの臨床試験といった感じで、我々の方が海外に学べ、遅れをとるとなると躍起になってあらゆる臨床試験/治験に取り組みすぎているのかもしれない。一つづつきちんとアプローチして、丁寧に結果を報告して行くことが重要なのかなと考えさせられました。MSKCCの医療に接して思ったことは、我々が行ってきている臨床試験や治験は欧米に遅れをとっているという感じはそんなに抱きませんでした。現に、肝胆膵癌の標準治療は本邦でもほぼすべて行える現状にあり、新たな治療の取り組みも積極的にグローバル試験に参加していくことでほぼ同じレベルでの治療は行え

ていると思います。唯一、我々に足りない部分は、我々が提案して、我々の主導で行っている試験ではなく、欧米で行われている試験に参加させていただいているだけであることが、今後改善すべき点であると理解できました。

医師になって16年、そのうち12年をがんセンターで過ごしてきた「井の中の蛙」の私にとって、MSKCCもまだまだ世界の中の一部かもしれませんが、少し「大海」を垣間見た気がします。MSKCCには人材の豊富さ、資金面の違いを見せつけられましたが、この少ない人材、資金の中ですべてを有効活用し、これからも「大海」に挑んでいき、もっと身近に感じられるようになりたいと思います。最後になりましたが、私のMSKCCでの後見人となって頂き、サンクスギビングやクリスマスパーティーに招いてくれたDr About-AlfaやDr O'Reilly、私にアパートを格安で貸してくれたり、緊急時に病院まで連れて行ってくれたり、ニューヨークを案内してくれたアパートのオーナーのMs Gladys、たどたどしい英語にも関わらず、真剣に接してくれたMSKCCの先生方やフェローの先生方、コメディカルの方々、ニューヨークを案内してくれ美味しい料理を紹介してくれた放射線技師の方々(写真5)、そして、私が緊急で運ばれた時にすぐに日本から駆けつけてくれ、最後までニューヨークで一緒に過ごしてくれた私の家族、皆様に支えられて、ニューヨーク研修生

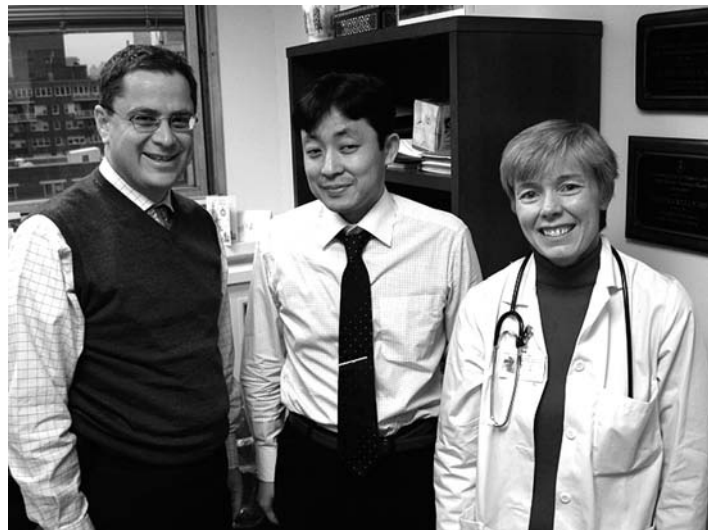


写真4 :Dr About-Alfa(左)とDr O'Reilly(右)



写真5：放射線技師さんとX'mas Dinner

活を楽しくそして有意義に送ることができました。本当に有難うございました。また、ニューヨークにまで応援に駆けつけてくれ、その上MSKCCで講演までしてくれ、日本の現状をしかと見せつけてくれたがん研究センター中央病院の放射線診断部の荒井部長、私の留守中の代理として様々な事務処理を担当してくれ、日本との懸け橋になって支えてくれた私の秘書の武井さん、多忙な中、快く送り出していただいたがん研究センター東病院や中央病院の肝胆膵内科の先生方や上腹部外科の先生方、医長不在の間きちんと切り盛りしてくれていた栗原師長ならびに7A病棟の看護師さん外来の看護師さんや生理検査室の技師さん、そしてこのような貴重な機会を与えてくださった江角院長、経済的な援助をして頂いたがん研究振興財団の方々に心から御礼申し上げます。

(いけだ まさふみ)

**【略歴】**

- 1969年1月 長崎県長崎市出身
- 1987年3月 長崎県立長崎北高校卒業
- 1994年3月 熊本大学医学部卒業
- 1994年5月 熊本大学医学部附属病院 第三内科
- 1995年4月 水俣市立総合医療センター 内科
- 1996年6月 国立がんセンター中央病院 内科レジデント
- 1999年6月 国立がんセンター中央病院 肝胆膵内科チーフレジデント
- 2001年6月 熊本大学医学部附属病院 第三内科
- 2002年11月 国立がんセンター中央病院 肝胆膵内科医師
- 2008年3月 国立がんセンター東病院 肝胆膵内科 医長

専門領域：肝胆膵領域の非手術療法

日本内科学会認定内科医  
 日本消化器病学会専門医  
 日本肝臓学会専門医